

# 敦煌本 P.3770 「俗講莊嚴廻向文」再考

Revisiting Dunhuang Manuscript P.3770 *Sujiang Zhuangyan Huixiang Wen*

荒見泰史

## 一、前言

P.3770「俗講莊嚴廻向文」は「俗講」の二文字が残される数少ない文獻として俗講研究、變文研究において早くから注目され、古くは那波利貞氏、福井文雅氏<sup>1</sup>などにその資料の重要性が指摘されている。特に「作梵；了，法師先念佛三二十口；竟，令都講舉經；便廻向。（作梵し、了れば、法師先ず佛を三二十口念じ、竟れば、都講を令て經 [題] を挙げしめ、便ち廻向せよ。）」のような儀禮の次第に關わる記載があることから、それまでにも俗講研究で指摘されてきた P.3849V や S.4417 の「(擬) 俗講儀式」をさらに詳細に考え<sup>2</sup>、俗講儀式とその次第を檢討する貴重な資料とされてきたのである。ただ、「莊嚴廻向文」という、この文獻以外には例のない、宗教儀禮中でもあまり馴染みのない用語だった爲か、その後その文體や由來についてはあまり論じられることはなかった。

こうした先行研究を承け、筆者はかつていくつかの論考によってその研究上の可能性について論じ<sup>3</sup>、P.2187「(擬) 破魔變」などでは敦煌の儀禮次第中に多く用

<sup>1</sup>那波利貞「俗講と變文」、『佛教史學』第1巻第3號，1950年，68頁。福井文雅「講經儀式の組織内容」、『敦煌と中國佛教』講座敦煌第7巻，大東出版社，1984年，369頁。

<sup>2</sup>P.3849V「(擬) 俗講儀式」については、向達「唐代俗講考」等、早期の俗講、變文研究において檢討が始められている。ただ、その翻刻には八關齋の次第が脱落するなど重大な見落としがあったが、多くの研究者が向達論文を引用していたため長年気づかれずにいたという経緯もある。参照拙稿「敦煌の故事略要本與變文」、『敦煌變文寫本的研究』，復旦大學博士學位論文，2001年6月；「敦煌本故事綱要本」、『姜亮夫、蔣禮鴻、郭在貽先生紀念文集』，上海教育出版社，2003年，326-347頁。

<sup>3</sup>荒見泰史『敦煌變文寫本的研究』「敦煌本“莊嚴文”初探」，復旦大學博士學位論文，2001年6月；荒見泰史「敦煌本“莊嚴文”初探」、『文獻』2008年第2期，2008年，42-52頁；ARAMI Hiroshi (荒見泰史): *The Tun-huang Su-chiang chuang-yen hui-hsiang wen* 俗講莊嚴廻向文 and Transformation

いられる「莊嚴文」が、「押座文」などとともに變文の冒頭部分に用いられて次第に小説の内容展開への導入、入話へと變形していくこと、そしてこの類似する冒頭部分が宋代話本をはじめ白話小説類に多くみられることを挙げ、「莊嚴文」もまた「押座文」と同様に、宗教儀禮から小説へという流れを表す確かな資料であることを指摘している。ただ、「莊嚴」の意味や儀禮における機能、その由來などについては、未だに明確にできていなかったように思う。

こうした流れの中で、鄭炳林氏、湛如氏、王三慶氏、侯冲氏らにより齋會、法會の儀禮次第とそれに關わる願文の研究が進められており<sup>4</sup>、そうした中で「莊嚴」が特に議論されることもあった。しかし、儀禮の意味内容においては「呪願」に近いとされる見解は提起されるものの<sup>5</sup>、その由來や、變文を含め、小説など文學への發展關係など筆者が主張してきたことに續く議論は見られなかったように思われる。

また別に、佐藤哲英氏、塚本善隆氏、廣川堯敏氏らの研究に續いて、張先堂氏、施萍婷氏、五十嵐明寶氏、林仁昱氏、李小榮氏、齋藤隆信氏等の研究を始めとし<sup>6</sup>、『淨土五會念佛誦經觀行儀』、『淨土五會念佛略法事儀讚』（以下『略法事儀讚』と略稱）の解釋や、10世紀敦煌における淨土五會念佛法事の研究がすすめられ、念佛法事やそれに伴う法照信仰、讚文を合唱する儀禮が盛んにおこなわれていたことが次第に明らかになり、これに據って『略法事儀讚』に記載される「莊嚴文」と

---

Texts, *ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture* No.105 (Published Aug.2013); 荒見泰史「敦煌の佛教儀禮と講唱文學——P.2091『讚釋文』、『踰城日文』を中心として」、『東方學研究論集 [日英文分冊]』, 臨川書店, 2014年, 34-45頁。

<sup>4</sup>鄭炳林『敦煌碑銘讚輯釋』甘肅人民出版社, 1997年; 湛如『敦煌佛教律儀制度研究』, 中華書局, 2003年, 特に251-290頁; 王三慶『從敦煌齋願文獻看佛教與中國民俗的融合』, 新文豐出版, 2009年; 侯冲『中國佛教儀式研究』, 上海古籍出版社, 2018年, 特に184-186頁部分。

<sup>5</sup>侯冲氏前掲書に據れば、「莊嚴」は「呪願」つまり施主を稱える「歎德」に類するものとの見解がある。この點については、S.2832に記載される儀式次第では、「莊嚴」と「歎德」を別の作法としていること、「俗講莊嚴迴向文」を含め多くの類似文獻で取り上げられる人物が直接儀禮に關わる人物でないばかりか、必ずしも固有の人物ではないことから、筆者は積極的に肯定できないと考えている。

<sup>6</sup>佐藤哲英『龍大圖書館山内文庫藏法照和尚念佛讚——本文附解説』, 慶華文化研究會, 1951年; 「法照和尚念佛讚について(上、下)」, 『佛教史學』第3卷第1號, 第2號, 1952年; 「敦煌出土法照和尚念佛讚」, 『西域文化研究』第6卷, 法藏館, 1963年; 廣川堯敏『敦煌出土法照關係資料について』, 『石田充之博士古稀記念論文集——淨土の研究』, 永田文昌堂, 1972年; 「禮讚」, 『敦煌と中國佛教』, 『講座敦煌』7, 大東出版社, 1984年; 塚本善隆『唐中期の淨土教』, 法藏館, 1975年; 張先堂「晚唐至宋初淨土五會念佛法門在敦煌的流傳」, 『敦煌研究』, 1998年, 第1期; 施萍婷「法照與敦煌初探」, 『一九九四敦煌學國際研討會文集・宗教文史卷・上』, 甘肅民族出版社, 2000年, 75-104頁; 五十嵐明寶『淨土五會念佛略法事儀讚』永田文昌堂, 2001年; 林仁昱『中國佛教歌曲之研究』, 法鼓山文教基金會, 2003年; 李小榮『敦煌佛教音樂文學研究』, 福建人民出版社, 2007年; 齋藤隆信『中國淨土教儀禮の研究』, 法藏館, 2015年。

「俗講莊嚴廻向文」の関係性がいよいよ信憑性を持つようになってきている。そこで、本稿では、改めて「俗講莊嚴廻向文」と法照『略法事儀讚』の「莊嚴文」の詳細な比較と「莊嚴」の意味の検討、そこから9、10世紀の俗講とこの五會念佛法事から後の文學への影響を考えてみたいと思う。

## 二、P.3770 寫本について

P.3770 寫本全體は以下のような内容から構成されている。

**P.3770 正面文獻：** ①十戒經/②(願文7編)/③張族慶寺文/④俗講莊嚴廻向文

① 首題： 1 十戒經

尾題： 37 十戒經

行數： 47 行

識語： 至德二載歲次丁酉五月戊申朔十四日辛酉，燉煌郡燉煌縣平康鄉洪文里男生清信弟子王玉眞，載十六歲，齋信如法，令諸燉煌郡燉煌縣平康鄉安昌里三洞法師中嶽先生，索□□求受十戒十四持身之品。……

解説： 道教の修道成仙の爲の十戒に關わる經。

參考文獻： 楠山春樹「道德經類付『莊子』『列子』『文子』『敦煌と中國道教(講座敦煌4)』，大東出版社，1984年，9頁；石井昌子「靈寶經類『敦煌と中國道教(講座敦煌4)』，大東出版社，1984年，156頁；宮川尚志「唐以前の河西における宗教・思想的狀況『敦煌と中國道教(講座敦煌4)』，大東出版社，1984年，309頁；王卡『敦煌道教文獻研究』，中國社會科學出版社，2004年，135頁；王卡「中國國家圖書館藏敦煌道教遺書研究報告『敦煌吐魯番研究』第7卷，北京大學出版社，2004年，357頁。

② 首題： 無

尾題： 無

行數： 104 行

識語： 無

解説： 書體の異なる5紙を接合し文範として使用されたとみられる。この5紙は第1紙1編18行、第2紙1編17行、第3紙1編16行(S.2146『置傘文』に類似)、第4紙2編20行と12行(20行目に「捨施發願文」の題が有るがS.4506『燃燈文』に類似)、第5紙2編12行と9行(2編目の冒頭に「禳災文」の題有り)から成っている。

參考文獻： 黃徵、吳偉『敦煌願文集』，嶽麓書社，1995年。

③ 首題： 張族慶寺文

尾題： 無

行數： 36 行

識語： 無

解説： 張議潮が入京前の咸通七年(866)に行った慶寺法會に關わる願文。

參考文獻： 楊寶玉、吳麗娛「P.3804 咸通七年願文與張議潮入京前夕の慶寺法會」、『南京師範大學報(社會科學版)』、2007年4期、66-72頁。

- ④ 首題： 俗講莊嚴廻向文  
 尾題： 闕  
 行數： 45 行  
 識語： 無  
 參考文獻： 那波利貞「俗講と變文」、『佛教史學』第 1 卷第 3 號，1950 年，頁 68。福井文雅「講經儀式的組織内容」、『敦煌と中國佛教』講座敦煌第 7 卷，大東出版社，1984 年，頁 369。荒見泰史『敦煌變文寫本的研究』「敦煌本“莊嚴文”初探」，復旦大學博士學位論文，2001 年 6 月；荒見泰史「敦煌本“莊嚴文”初探」、『文獻』2008 年第 2 期，2008 年，42-52 頁；ARAMI Hiroshi (荒見泰史): The Tun-huang Su-chiang chuang-yen hui-hsiang wen 俗講莊嚴廻向文 and Transformation Texts , *ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture* No.105 (Published Aug.2013)；荒見泰史「敦煌の佛教儀禮と講唱文學——P.2091『讚釋文』、『踰城日文』を中心として」、『東方學研究論集 [日英文分冊]』，臨川書店，2014 年，34-45 頁。
- 背面文獻 ⑤(願文) /⑥(雜寫 2 行) /⑦勅河西節度使牒(倒寫 2 編) /⑧(藏文等 3 行) /⑨數行/⑩(題識 6 行)
- ⑤首題： 無  
 尾題： 無  
 行數： 5 行  
 識語： 無  
 本文： 某乙聞：天儀運像，羅合宇宙之間，品物流形，波濤朝詢(夕)之際，明則有日月，患則有鬼神。雖孔父垂文、周公，建德美矣。[□]哉！伏(福)哉！勝哉！熟如我大雄揚齋，利見多矣。誕生靈跡，降室深宮，道扁(遍)天地之先，化出陰陽之表，懷悲念福，燭三千運救人，澤被沙界。  
 解說： 筆跡は異なるが内容上⑥と接続すると見られる。
- ⑥首題： 無  
 尾題： 無  
 行數： 2 行  
 識語： 無  
 本文： 夫西方有聖號釋迦，為金輪孀孩，淨飯王子，應[妙]蓮華劫德息。(以下擱筆)
- ⑦ 首題： 勅河西節度使牒  
 尾題： 無  
 行數： 22 行  
 識語： 無  
 解說： 倒寫 2 點有り。
- ⑧首題： 無  
 尾題： 無  
 行數： 3 行  
 識語： 無  
 解說： 藏文 3 行。「何周(河州)節度尚乞」「瓜州大節度使論紇頰熱渴支」を轉寫するといふ。
- 參考文獻： 高田時雄「チベット文字轉寫阿彌陀經の奥書」、『人文研究』(小樽商科大学)第 65 輯、1983 年、8 頁。

- ⑨首題： 無  
尾題： 無  
行數： 12 行  
識語： 無  
解説： 『大乘百法明門論開宗義決』卷第一（『大正新脩大藏經』第 85 卷、1071 頁 b 部分）の注釈。「商人」「暹行丞」「鳩而煞之」「恐泄家事」「母後他非」「子見忿怒」などの句に對する註釋がある。
- ⑩首題： 無  
尾題： 無  
行數： 6 行  
識語： 無  
本文： 此卷尾有出家律榮入道啓。或若要檢用。此卷内、蕃漢二代表嘆皇帝及吐蕃贊普、諸官吏、廻向發願及戒懺、諸雜齋文等一卷。

『俗講莊嚴廻向文』の本文はすでに拙著『敦煌變文寫本的研究』にも全文を紹介しているが、注記や和譯を加えるなど若干修正する部分もあり、また以下に『略法事儀讚』との比較説明を行う便からも、ここに再録しておくことにする。

143. 俗講莊嚴廻向文 悟真 作梵；了，法師先念佛三二十口；竟，令都講舉經；便廻向。
144. 以此開讚大乘甚深句義，所生功德，無量無
145. 邊。先用奉資梵釋四王、龍天八部。伏願：威
146. 光熾盛，福力彌增；興運慈悲，救人護國，使四
147. 時順序，八表無虞，九橫不侵，萬人安樂。亦使
148. 法輪常轉，佛日長明，刀兵不興，疫毒休息；
149. 經聲歷歷，上徹天宮；鍾梵鈴鈴，下臨地獄；
150. 刀山落刃，劍樹摧鋒；爐炭收烟，冰河息浪；
151. 針咽餓鬼，永侮飢羸；鮮甲畜生，莫相令□（噉）；
152. 歌謠乾闥，弦管長鳴；鬪淨（爭）修羅，旌旗永折，
153. 散友大將，護國護人，歡喜龍王，調風調雨，惡
154. 星變怪，掃出天門；異獸靈禽，潛藏地戶，懷
155. 胎難丹，母子平安，征客遠行，鄉關早達；獄閃
156. 癱閉，枷鎖離身，病臥纏眠，起居輕利；亡過
157. 眷屬，頂拜彌陀；合道場人，常聞正法。亦願盲者
158. 見道，聾者再聞，瘰者能言，愚者得智。如
159. 斯不完具者，願承此法力因緣，悉得法相具
160. 足。然后天成地平，河清海晏，五谷豐登，□□（千廂）
162. □（溢）盈，官布恩波，人和樂業，作煇時衆，□□
163. 精誠。奉爲龍天八部，土地靈祇，大聲□□（稱念）；

164. “阿彌陀佛”。
165. 伏持勝福，次用莊嚴當今皇帝，
166. 永垂闡化，四海一家，廣扇仁風，三邊鎮靜，時
167. 衆運至，誠心稱念：“觀世音菩薩”。以下例此念佛或菩薩。
168. 又持勝福，次用莊嚴皇太子。伏願：前星永曜，少海澄瀾，磐石增重，惟（維）城作鎮。
169. 又持勝福，次用莊嚴將相百官。伏願：塩梅大鼎，
170. 舟楫巨川，泉石先以貞其心，松篁然後方其
171. 壽。使乃方清泰，八表無虞，四海安和，保無徵戰。
172. □□（又持）勝福，次用莊嚴我司空貴位。伏願：金剛作
173. 體，般若爲心，長爲大國之重臣，永作蒼生之
174. 父母。
175. 又持勝福，次用莊嚴諸官吏等。伏願：美名
176. 美貌，日益日新，不善不祥，時清時散。下臨百
177. 姓，惟直惟清，上順帝心，常忠常赤。
178. 又持勝福，次用莊嚴僧錄大德。惟願：敷揚正述，鎮
179. 遏玄門，色力堅於丘山，惠命逾於賢劫。
180. 又持勝福，次用莊嚴諸尊宿大德等。伏願：駕三
181. 車而誘物，嚴六度以莊懷，使法無衰變之憂，
182. 釋衆保康慶之樂。
183. 又持勝福，次用莊嚴諸禪律大德等：惟願弘法
184. 不倦，匡救無疲，宣 [傳] 至道，以利蒼生，□法□，而招
185. 品物。
184. 又持勝福，次用莊嚴法尼大德：惟願四依常滿，八
185. 敬常圓，意樹恒春，心燈永曜，即使八功德水，去垢陰
186. 災，七淨妙花，莊嚴其體。
187. 又持□□□□□□（勝福，次用莊嚴諸）鄉官父大檀越優婆夷等：惟  
(後缺)

作梵し、了れば法師先ず佛を三二十口念じ、竟れば都講を令て經 [題] を擧げしめ、便ち廻向せよ。

此の大乘甚深句義を開讚するを以て生ずる所の功德は、無量無邊なり。

先ず用ひ奉りて梵釋四王，龍天八部を資<sup>たす</sup>けん。伏して願はくは、威光は熾<sup>さかん</sup>盛にして、福力は彌<sup>いよいよ</sup>増し、運を興しかつ慈悲にして、人を救

ひ國を護り、四時をして順しく序べしめ、八表に虞れ無く、九横に侵さず、萬人は安樂なり。亦た法輪を<sup>た</sup>使て常に轉ぜしめ、佛の日は長く明<sup>かがや</sup>き、刀兵は興らず、疫毒は休息<sup>や</sup>み、經聲は歴歴たりて、上は天宮に徹し、鍾梵は鈴鈴たりて、下は地獄に臨み、刀山は刃<sup>やいば</sup>落ち、劍樹は鋒<sup>ほこさきくじ</sup>摧かれ、爐炭は烟<sup>けむり</sup>收まり、冰河は浪<sup>やす</sup>を息め、針咽餓鬼は、永く飢へと羸<sup>つか</sup>れを侮<sup>しの</sup>ぎ、鮮甲畜生は、相ひ噉<sup>く</sup>は令むること莫く、歌謠は乾闥たりて、弦管は長く鳴り、鬪争の修羅は、旌旗<sup>はた</sup>を永く折り、散友大將は、國を護り人を護り、歡喜の龍王は、風を調へ雨を調へ、惡星の變怪なるは、天門より掃<sup>いだ</sup>き出し、異獸、靈禽は、潛みて地戸に藏れ、懷胎せる難丹は、母子平安にして、征客の遠行せるは、郷の關へ早く達し、獄閃に癱閉せらるるは、枷鎖は身を離れ、病に卧せ眠りに纏らるるは、起居して軽く利くし、眷属を亡過せるは、彌陀を頂き拜み、道場に合ふ人をして、常に正法を聞かせしめんことを。亦た願はくは盲者をして道を見せしめ、聾者をして再び聞かしめ、瘰者をして能く言はしめ、愚者をして智を得せしめんことを。斯の如く具へ完からん者は、願はくは此の法力と因縁を承け、悉く法相具足を得せしめんことを。然る後に天は成り地は平らかにして、河は清く海は晏<sup>やす</sup>らかにして、五谷は豊かに登り、千の廂は溢<sup>あふ</sup>溢れ、官は恩みの波を布き、人は和み業を楽しみ、焔を作す時の衆をして、□□精誠ならしめんことを。奉んで龍天八部、土地靈祇の爲めに、大聲にて稱念せん「阿彌陀佛」と。

伏して勝福を持ちて、次に用て當今の皇帝を莊嚴す。永く闡化を垂れ、四海一家に、廣く仁風を扇ぎ、三邊鎮靜にして、時の衆をして運び至らせしめん。誠心に稱念せよ「觀世音菩薩」と。以下、此を例とし佛或は菩薩を念ぜよ。

又、勝福を持ちて、次に用ひて皇太子を莊嚴す。伏して願くは、前星永く曜<sup>たいし</sup>き、少海は瀾<sup>なみ</sup>を澄め、磐石は重みを増し、維城は鎮<sup>たいし</sup>りを作さんことを。

又、勝福を持ちて、次に用ひて將相、百官を莊嚴す。伏して願くは、大なる鼎は塩梅され、舟は巨きな川に楫<sup>かじと</sup>られ、泉の石は先づ貞を以て其の心となし、松篁たりて然る後には其の壽<sup>ほしいま</sup>を「方」にせんことを。使ひすれば乃ち方は清泰たりて、八表は虞<sup>おそ</sup>れ無く、四海は安らかで和み、戦ひを徵むること無きを保たんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて我が司空貴位を莊嚴す。伏して願くは、金剛體を作し、般若心を爲し、長く大國の重臣と爲り、永く

蒼生の父母と作らんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて諸官吏等を莊嚴す。伏して願くは、美名美貌は日に益し日に新しくして、善ならず祥ならざるものには時に清くし時に散らさんことを。下は百姓に臨むに惟だ直く、惟だ清かにして、上は帝の心に順じ常に忠、常に赤ならんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて僧録大徳を莊嚴す。惟だ願くは、正述を敷げ揚げ、玄門を鎮め遏め、色力は丘山より堅く、惠命は賢劫を逾へんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて諸の尊宿大徳等を莊嚴す。伏して願くは、三車を賀りて物にて誘ひ、六度を嚴びて莊なるを以て懐こころにいだき、法を使て變るを衰しむ憂ひを無からしめ、釋衆をして慶よろこびを康やすらかにする樂を保たしめんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて諸禪律大徳等を莊嚴す。惟だ願くは法を弘むるに倦かず、匡たすげ救ふに疲れること無く、至道を宣べ傳へ、以て蒼生を利し、□法□して品物を招かんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて法尼大徳を莊嚴す。惟だ願くは四依常に満ち、八敬常に圓かに、意樹恒に春にして、心燈永く曜き、即ち八功の徳水を使ひて垢や陰災を去らしめ、七淨の妙花は其の體を莊嚴せんことを。

又、勝れる福を持ちて、次に用ひて諸郷官父、大檀越、優婆夷等を莊嚴す。惟だ願くは……(後缺)

上を見てもわかるように、大きく3つの段落からなっている。なおこうした構造は敦煌のほかの類似する願文類にも多く見られるものである。

冒頭に「以此開讚大乘甚深句義，所生功德，無量無邊。(此の大乘の甚だ深き句義を開讚するを以て生ずる所の功德は、無量無邊なり。)」として、①儀禮に際して先ず大乘の教えを讚える功德を擧げ、次に②これを四天王、天龍八部衆などの神祇に「先用奉資梵釋四王、龍天八部(先ず用ひ奉りて梵釋四王、龍天八部を資けん)」と唱え稱える。そして稱える言葉が續き、最後には「奉爲龍天八部、土地靈祇，大聲稱念：“阿彌陀佛”。(奉りて龍天八部、土地靈祇の爲に、大聲にして稱へ念ぜよ、「阿彌陀佛」と。)」として神祇衆のために阿彌陀佛を唱えて最初の段落が終わる。ここで阿彌陀信仰が見えていることは『略法事儀讚』の記述との関係からも一應確認しておきたい。

續く段落では③「伏持勝福，次用莊嚴，當今皇帝，……(伏してこの勝なる福を持ち、次に用ひて當今皇帝を莊嚴す。……)」とし、皇帝を稱える言葉が續き、「誠

心稱念：“觀世音菩薩”。」として觀音菩薩を唱え、「皇太子」「將相百官」「我司空貴位」「諸官吏」「僧錄大德」「諸尊宿大德」「諸禪律大德」「法尼大德」「(諸) 鄉官父大檀越優婆夷」の順で同じように稱えていく。なお皇帝の段の最後に注記として「以下例此念佛或菩薩(以下此を例として佛或ひは菩薩を念ぜよ)」があるので、それぞれの最後には佛菩薩を唱えていたことが分かる。

なお、以上の中で登場する「莊嚴」の用例は、題名にも關るものであることは言うまでもないが、いずれも「皇太子」「將相百官」「我司空貴位」「諸官吏」「僧錄大德」「諸尊宿大德」「諸禪律大德」「法尼大德」「(諸) 鄉官父大檀越優婆夷」という人物を賓語とする動詞としている點から、鄭阿財氏、黃徵氏などの理解として世俗の人物を稱える意味として用いられると解釋されてきた<sup>7</sup>。こうした點から「廻向」と同じ意味であると筆者も考えてきたところである。それらの解釋に間違いがあるとは今日も考えてはいないが、多くの日本の佛教儀禮で馴染みのある寺院(道場)を建てる、或いは飾りつけていく行爲としての「莊嚴」という用法との乖離が氣になるところである。

しかし、近年再度『略法事儀讚』を解釋しなおす機会があり、改めて「莊嚴文」と五會念佛法事におけるその次第の意味について檢証する中で、「莊嚴文」が道場を淨土世界と同様になるよう莊嚴するための作用があることを再確認し、敦煌の「莊嚴文類」もまた同じ目的である可能性に氣づいた。次節では、『略法事儀讚』とその「莊嚴文」の機能、そして「莊嚴」の意味について論じていきたい。

### 三、『略法事儀讚』と「莊嚴文」の機能

『略法事儀讚』については、筆者はかつてたびたび言及してきた<sup>8</sup>。8世紀末の法照の編であることは間違いがなく、敦煌に残される同じ法照の『淨土五會念佛誦經觀行儀』(P.2066、P.2250、P.2963等)とも共通性が高く、『略法事儀讚』の序文にもこの二書が廣略の關係であることが論じられている。

『略法事儀讚』の中では、「序」の後ろは儀禮次第に従って「云何梵」「讚請文」「莊嚴文」「散華樂文」「五會念佛」「寶鳥讚」と續き(「五會念佛」では念佛のほかには念佛の抑揚についての説明がある)、各種の經讚が續いていく。この「莊嚴文」

<sup>7</sup>第57回國際東方學者會議(シンポジウムI日中『願文』の比較(日本教育會館)、2012年5月25日)での發言に據る。

<sup>8</sup>荒見泰史「淨土五會念佛法事と八關齋、講經」、『シルクロードと近代日本の邂逅』、勉誠出版、191-228頁、2016年；荒見泰史「法照門徒的念佛法事與《法照傳》的宣唱」、『饒學與華學』、上海辭書出版社、349-362頁、2016年6月；荒見泰史、桂弘、「敦煌淨土讚與變文」、『敦煌寫本研究年報』第13號、133-147頁、2019年。

は、先の二段落形式を含め、敦煌本「俗講莊嚴廻向文」と以下のように内容が酷似しており、両者の関係が指摘できる。

粵大哉，至理真法一如，化物利人。弘誓各別，故我釋迦應生於濁世，阿彌陀出現於淨土。方淨穢兩殊，利益齊一。若易修易證，真唯淨土教門，然彼西方殊妙難比。其國土也，嚴以百寶蓮敷九品以收人。其名號也，能蕩千殃音開五會而攝物。故使稱其名者，則十方諸佛常護其人，願生其國者，則異華五雲爭捧其座。是知，彌陀悲願不可思議。實謂，啓三界之橫門，截四生之直路。故得恒沙諸佛舒舌證明。勸念彌陀令生佛國。若不以斯淨教所在佛宣。則何以能令未聞者聞未見者見。今之念佛意在茲焉。

惟願釋梵護世衛國衛人。八部天龍調風調雨。

伏願皇帝輪寶飛來。韜戈偃鉞。舜澤遐霑於萬國。堯風遠備於八荒。

太子聲飛洊雷，諸王志堅盤石；公主銀樓耀彩；卿相永鎮台衡無戎。節越長光。堯天永佐郎官侍御。雲飛省閣星映天台。大將高斑。榮耀日新。台逾百勝長官。馬分駝色衣含繡文。亟薄慰等佐理分憂。清聲遠振。禪和尚定水澄淨。禪河廁清慈風莫收。慧日長掛。法和尚道山彌峻。慧海逾深久。住人天。常爲舟楫。律和尚戒珠常淨。無慚照乘之理。定沼恒清。豈謝滄浪之綠。當寺三綱。照彰梵宇。宿睦乘門徒衆。稟其清風。寺舍和於水乳。諸闍梨等三學圓明。慧燈長映。願弘斯教同往淨土。尼衆等戒月常明。凝神入定。恒春道樹。永秀覺華。諸公等福霑山岳。壽齋椿鶴。夫人娘子玉質長春。千秋不易。清信士女等恒沙業。累聞佛名。以冰消。無量福田。隨念佛而增長。觀業成就三昧現前。若坐若行常見諸佛。……

ああ、大いなるかな、<sup>いた</sup>至れる<sup>ことほり</sup>理と真なる法は一如にして、物を化し、人を利すことは、<sup>ぐぜい</sup>弘誓は各れ別にし、故に我が釋迦は<sup>まさ</sup>應に<sup>じよくせ</sup>濁世に生まれるべくし、阿彌陀は淨土に出現す。<sup>まさ</sup>方に淨と穢、兩つにして殊るも、利益は齊しく一なり。修し易く證し易きが若くは、真に唯だ淨土教門のみにして、然ふすれば彼の西方は殊に妙なること比べ難きなり。其の國土なるや、嚴なること百寶を以てし、蓮は九品に敷かれ以て人を收むなり。其の名號なるや、能く千の<sup>わざはひ</sup>殃の音を<sup>あらひなが</sup>蕩し五會を開きて物を<sup>ひ</sup>攝く。故に其の名を稱せ使むれば、則ち十方の諸佛、常に其の人を<sup>まも</sup>護り、其の國に生ると願へば、則ち異華、五雲の争ひて其の座を捧

ぐなり。是れ知るべきは、彌陀の悲願は不可思議なることなり。實に謂ふべきは、三界の横門を啓き、四生の直路を截つことなり。故に恒沙の諸佛は舌を舒べて證明せんとす得し。

惟だ願はくは、釋梵の世を護り國を衛り人を衛り、八部天龍の風を調へ雨を調へんことを。

伏して願はくは、皇帝、輪寶のごとく飛び來り、戈を韜め、鉞よろひを偃うつぶせにし、舜のごとく澤ほすこと遐かに萬國を霑し、堯のごとき風へは遠く八荒に備はらしめんことを。太子、聲の飛ぶこと洊りに雷のごとからんことを。諸の王の志は堅く盤石ならんことを。公主、銀の樓に彩を耀かさんことを。卿相、永く台衡を鎮め戎無からしめ、節は(戎の地へと)超へ長く光かさんことを。堯天は永く郎官、侍御を佐け、雲、省閣を飛び、星、天台に映ぜんことを。大將、高く斑にして、榮耀、日に新しく、台、逾ならんことを。百勝長官、馬は駝色に分け衣は繡文を含まんことを。亟、薄、慰等、理を佐け憂を分ち、清聲は遠く振はんことを。禪和尚、定まる水のごとく澄み淨くして、禪河(禪定の事)は、廊、清しとし、慈風は收まること莫く、慧日長く掛からんことを。法和尚、道ゆく山は彌めて峻たかくけはしく、慧の海は逾いよ深く久くして、人天に住ひて、常に舟の爲めに楫かじとらんことを。律和尚、戒の珠は常に淨にして、乗を照らす理に慚じること無く、定沼は恒に清く、豈に滄浪の緑を謝さんや。當寺の三綱、梵字を照彰し、乗門の徒衆を宿睦し、其の清風を稟け、寺舎は水乳に和さんことを。諸闍梨等、三學圓明にして、慧の燈は長く映じ、斯の教へを弘め、同に淨土へ往くを願はんことを。尼衆等、戒月は常に明るくし、入定することに凝神し、恒に春の道樹たりて、永く覺の華として秀でんことを。諸公等、福は山岳を霑し、壽は椿鶴と齋しからんことを。夫人、娘子、玉質は長春にして、千秋にしても易はらざらんことを、清信士女等、恒沙の業なし、累ねて佛名を聞き、氷を以て消しさり、無量の福田は、念佛に隨ひて増長し、觀業(心理を見る業)は成就し三昧は前に現はれ、若しくは坐し若しくは行ずるも常に諸佛を見んことを。……

以上のように、釋梵、八部天龍を稱え、續けて「皇帝」「諸王」「太子」「公主」「大將」「百勝長官」「禪和尚」「法和尚」「律和尚」「當寺三綱」「諸阿闍梨等」「尼衆等」「諸公等」「夫人、娘子」「清信士女等」と續けて稱えている。この順も含めて「俗講莊嚴廻向文」とは内容が酷似していると言って良い。表現上も類似する記載

が目立つことは見てのとおりである。

同文の本文中には「莊嚴」の言葉は見られないが、『略法事儀讚』の前後文にはたびたび「莊嚴」の文句が見え、「莊嚴文」を解く内容が見られている。中でも以下の2例は五會念佛法事での「莊嚴」の意味を知るうえで重要であろう。「莊嚴文」に続く「散華樂文」に言う。

散華樂，散華樂。奉請釋迦如來入道場。散華樂。  
散華樂，散華樂。奉請十方如來入道場。散華樂。  
散華樂，散華樂。奉請彌陀如來入道場。散華樂。  
散華樂，散華樂。奉請觀音、勢至、諸大菩薩入道場。散華樂。  
道場莊嚴極清淨，散華樂。  
天上人間無比量。散華樂。

請じ奉る、釋迦如來の道場に入らんことを。請じ奉る、十方如來の道場に入らんことを。請じ奉る、彌陀如來の道場に入らんことを。請じ奉る、觀音、勢至、諸大菩薩の道場に入らんことを。道場は莊嚴され極めて清淨なり。天上、人間、比べ量ること無し。(本文中の小字の「散華樂」はいずれも「和聲」の指示と見られる。訓讀文中では省略する。)

この文は、今日でも散華の作法に唱えられる文であるが、『略法事儀讚』の次第では「莊嚴文」を読み終え、佛菩薩を道場に招くときに唱えられることになる。この最後に「道場は莊嚴され極めて清淨にして、天上、人間、比べ量ること無し。」としており、前の「莊嚴文」の作法により道場が莊嚴され「天上」と同じく清淨になったことを表している。さらに「散華樂」に続く「寶鳥讚」に言う<sup>9</sup>。

極樂莊嚴間雜寶。彌陀佛。實是希奇聞未聞。彌陀佛，彌陀佛。  
寶鳥臨空讚佛會。彌陀佛。哀婉雅亮發人心。彌陀佛，彌陀佛。  
晝夜連聲無有息。彌陀佛。文文句句理相同。彌陀佛，彌陀佛。  
或說“五根、七覺分”。彌陀佛。或說“八聖、慈悲門”。彌陀佛，彌陀佛。  
或說“他方離惡道”。彌陀佛。或說“地獄封人天”。彌陀佛，彌陀佛。  
或說“散善波羅蜜”。彌陀佛。或說“定慧入深禪”。彌陀佛，彌陀佛。  
或說“長時修苦行”。彌陀佛。或說“無上菩提因”。彌陀佛，彌陀佛。  
菩薩聲聞聞此法。彌陀佛。處處分身轉法輪。彌陀佛，彌陀佛。  
願此法輪相續轉。彌陀佛。道場衆等益長年。彌陀佛，彌陀佛。

<sup>9</sup>『大正新脩大藏經』第47卷，476頁c。

衆等迴心生淨土。彌陀佛。手執香花往西方。彌陀佛，彌陀佛。

實に是れ希奇にして、聞くに未だに聞かざるなり。寶鳥、空に臨みて、佛の會を讚じ、哀婉、雅亮にして人心に發す。晝夜連なる聲、息つくこと有るなし。文文句句、理相ひ同じ。或ひは説ふ「五根、七覺分」と。或ひは説ふ「八聖、慈悲の門」と。或ひは説ふ「他方へゆき、惡道を離る」と。或ひは説ふ「地獄、人天に封ぜらる」と。或ひは説く「散善にても波羅蜜にいたる」と。或ひは説く「定慧もて、深く禪に入る」と。或ひは説く「長き時にて、苦行を修せ」と。或ひは説く「無上菩提の因」と。菩薩の聲聞、此法を聞き、處處に分身して法輪を轉ず。願はくは此の法輪、相續き轉じ、道場の衆等、長年を益し、衆等、迴心して淨土を生じ、手に香花を執りて西方に往かんことを。

ここでは、天上と同様に清淨となった道場に、佛たちが集うことを稱える淨土の寶鳥が佛法の理を説きつつ飛ぶ情景があらわされる。ここでも冒頭に道場が莊嚴されたことを言っている。

こうした淨土世界の莊嚴については法照の五會念佛の根據となる『大無量壽經』に詳しくあり、これを受けたものであろうことは容易に推測される。これらより見るに、大きくは莊嚴とは道場、或いは廣く言えばこの世界を淨土と同様に飾り立てていくこと、と理解されるところである。では、敦煌本「俗講莊嚴迴向文」で「皇帝」等の「人」を賓語として使用された動詞「莊嚴」をいかに理解するかであるが、同じ「俗講莊嚴迴向文」でも二段落のうち天神地祇を稱える前段では莊嚴と稱えられず、後段の「皇帝」以下「人界」の人々にのみ莊嚴がなされているのは、一つにはこうした「人界」の人々に功德を迴向して莊嚴し、淨土世界へ導くことを言う、と考えられるところである。S.2832『(擬) 齋儀』、S.5638『女莊嚴』、『亡莊嚴』等などを始め、亡者を莊嚴する願がみられるのも、このように見れば容易に理解されるであろう。

#### 四、莊嚴の意味とは

ここで改めて儀禮における莊嚴の意味について考えてみたい。

莊嚴とは、今日の日本の寺院での宗教活動でもたびたび使われ、大變になじみ深い言葉であることは言うまでもない。

「莊」「嚴」もいずれも重々しく、強い敬意、おそれを表す言葉であり、漢・荀悦『漢紀』「武帝紀」では、「王太后皆莊嚴，將入朝。（王太后皆な莊嚴し、將に入

朝せんとす。)」のように使われるのが早い例とされる。道義複合語であるために「嚴莊」という語も『管子』「形勢解」などに見えている。その場合も嚴肅であり端正であるという意味となる。呉・支謙『梵網六十二見經』に「……有異道人，受人信施食，便沐浴以雜香塗身，自莊嚴，以鏡自照，持高繖蓋，著履結髮，以珠珞珉；佛皆離是事。……（……異道の人、受人信施食，便ち沐浴して雜香を以て身に塗り、自ら莊嚴し、鏡を以て自ら照し、高繖蓋を持ちて履を著け髮を結び、珠珞を以て珉る有り。佛は皆な是の事を離る。……）」のように見え、後秦・竺法念『長阿含經』「鬱單曰(越)品第二」に「又其河中有衆寶船，彼方人民欲入中洗浴遊戲時，脫衣岸上，乘船中流，遊戲娛樂訖已，度水遇衣便著，先出先著，後出後著，不求本衣。次至香樹，……次到莊嚴樹，樹為曲躬，其人手取種種莊嚴，以自嚴飾。……（又其の河の中に衆寶船有りて、彼の方に人民は中に入りて洗浴し遊戲せんと欲する時、衣を岸上に脱ぎて乗船中流し、遊戲、娛樂れ訖已れば、水を度るに衣に遇へば便ち著け、先に出づれば先に著け、後に出ずれば後に著け、本の衣を求めず。次に香樹に至れば、……次に莊嚴樹に到れば、樹は為めに曲躬し、其の人は種種の莊嚴を手に取り、以て自らを嚴かに飾る。……）」のような早期の譯出の例に見えるのは、基本的にはこの意味である。つまり、漢語としての意味は、装いが端正で嚴肅な様子を表す意味が根底に存在しており、その後の佛經翻譯においても同様の意味で使用されてきたことになる。梵語の *alamkāra* はこの意味にかなり近いのではないかと思う。今日的な寺院の飾りつけなどに用いられる用例とはやや異なるようにも思えるかもしれないが、以降の佛教文獻にもこの例で使用される用例は膨大である。道場に入り、また佛菩薩に近づくときの信徒の装いとしての莊嚴という意味としてそのまま使用されていったと考えればよいのであろう。

別に、佛教語としてはサンクリット語の *vyūha* などの譯語としても「莊嚴」が用いられる。こちらは、辭書的には多くの戦闘編成的な意味から轉じて超自然的な配置を意味する言葉として使用されるようになっているとされ、佛土に轉じることから、佛堂を建立し、道場や佛像を美しく嚴かに飾る意味として使用されてきたようである。今日、寺院内で言う、道場の裝飾は、主にこの語の譯として使用されたことに據ると見れば良いのであろう。後秦・鳩摩羅什譯『金剛般若波羅蜜經』では「『世尊！ 如來在然燈佛所，於法實無所得。』『須菩提！ 於意云何？ 菩薩莊嚴佛土不？』『不也，世尊！ 何以故？ 莊嚴佛土者，則非莊嚴，是名莊嚴。』（『世尊よ、如來然燈佛の所に在りて、法に於て實に得る所無し』と。『須菩提よ。意に於ては云何。菩薩、佛土を莊嚴するや不や』と。『不なり、世尊よ。何の故を以てか。佛土を莊嚴するとは、則ち莊嚴に非ずして、是れ莊嚴と名く』と。）」<sup>10</sup>のよう

<sup>10</sup> 『金剛般若波羅蜜經』、『大正新脩大藏經』第8卷，749頁c。

に見えているのはこの語の譯とみられている<sup>11</sup>。浄土經典類ではこの語が多く用いられるとされ、『佛説無量壽經』で、「時彼比丘聞佛所説嚴淨國土，皆悉觀見。超發無上殊勝之願，其心寂靜，志無所著，一切世間無能及者。具足五劫，思惟攝取莊嚴佛國清淨之行。」に見られる例はこの意で使用されているものとみることができるであろう<sup>12</sup>。少なくとも、先に挙げた『略法事儀讚』の次第にみられる「讚請文」「莊嚴文」「散華」「寶鳥讚」の次第の中では、道場を浄土と同等にする、という趣旨が明確に見られている。さらに言えば、「莊嚴文」では「皇帝」「諸王」から「尼衆等」「諸公等」「夫人、娘子」「清信士女等」に至るまでを稱えて最後に「……無量福田。隨念佛而增長。觀業成就三昧現前。若坐若行常見諸佛。（……無量の福田は、念佛に隨ひて增長し、觀業（心理を見る業）は成就し三昧は前に現はれ、若しくは坐し若しくは行ずるも常に諸佛を見んことを。）」で締めくくる内容を以てし、更に全體を「莊嚴」のための文として「莊嚴文」としている點も重要であろう。こうした點から見て、「莊嚴」とは「道場を浄土と同等とし、世俗の國土全體を莊嚴して、佛國土、浄土に近づけようとする願い」と理解するのが「莊嚴文」の趣旨に近いものと思われるのである。のちの「俗講莊嚴廻向文」では、『略法事儀讚』「莊嚴文」とは異なり、「皇太子」「將相百官」「我司空貴位」「諸官吏」「僧錄大徳」「諸尊宿大徳」…と順に稱える際に、個別に「又持勝福，次用莊嚴○○」としているが、文を引き繼いでいる以上、その本來の宗教的意義は同じであろう。ただこの時にはおそらく「莊嚴」の本來の意味であり *alamkāra* の譯語としての意味合いとしても受け取れるようになっているように思われるのである。その際の理解としては、佛菩薩を莊嚴するのと同様の理解となろうが、結果としてはそれによって佛國土、浄土にあるのと同じようにこの世界を飾り立てるという意味にはなるのではないかと思う次第である。

## 五、餘論——押座文、莊嚴文から小説へ

こうした『略法事儀讚』の「莊嚴文」が、敦煌本の「俗講莊嚴廻向文」はじめこれに類する所謂「莊嚴文」類に見られるさまざまなバリエーションを経て、やはり同じ敦煌の變文資料の冒頭部分に見られること、さらには類する文體が中世日本の願文にまで廣く見られているなどの廣がりについてはすでに前稿にも記して

<sup>11</sup> V.S. Apte: *THE PRACTICAL SANSKRIT-ENGLISH DICTIONARY* のほか、中村元『佛教語大辭典』（東京書籍）等の解釋にも據っている。

<sup>12</sup> 『佛説無量壽經』卷上、『大正新脩大藏經』第12卷，267頁c。

きたところである<sup>13</sup>。

その儀禮文獻にバリエーションを生じせしむる理由について『略法事儀讚』の「序」にも記されている。それに據れば、浄土五會念佛法事は、そもそも廣略の二種（前述）があり、法事の規模や目的、施主の事情などによって文體が變更されるべきであることが説かれている。座主も僧俗のいずれでもよいことが述べられている點は俗講を考えるうえで大變興味深い。そうした中で、「莊嚴文」も法事を行う道場の状況によって變更されるべきであることが説かれている。

以下に、『略法事儀讚』に見える法事を執り行う上での特徴や次第が分かる部分を引用しておく。

……凡作法事人，若道若俗，多即六七人，少即三五人，揀取好聲解者。總須威儀齋整，端坐合掌，專心觀佛。齋聲齋和切，不得笑左右顧視；起真實悲濟之心，勿爲名利。衆詮一人爲座主，稽請、莊嚴、經讚法事，須知次第。一人副座，知香火、打磬、同聲、唱讚，專知檢校。先須焚香、聲磬、召請聖衆。當座人念佛一聲白衆云：“敬白道場衆等。總須發至誠心端坐合掌，觀想阿彌陀佛、一切賢聖，如對目前。若能如是，用心即賢聖降臨，龍天護念。聽聞經讚法事，令衆等即於言下，滅無量罪，獲無量福，心開意解，速證甚深念佛三昧，得無生忍，獲大總持，具六波羅蜜，神通自在。”言訖即打磬一下；作梵；了，念阿彌陀佛、觀音、勢至、地藏菩薩，各三五十聲；然後至心稽請；次莊嚴；了，依前念佛。即須觀其道場徒衆多少，或晝或夜，或廣或略，有道場請主，爲何善事，切須知，時別爲莊嚴，廣與念誦。坐道場時，或有兩坐、三坐乃至多坐，其彌陀觀經，一坐一啓。……

……凡そ法事を作す人は、若しくは道、若しくは俗、多ければ即ち六、七人、少なければ即ち三、五人、好き聲の解する者を揀び取れ。總じて須らく威儀をととのへ、齋整として端ひ坐りて合掌し專心に觀佛せよ。聲を齋へ和を齋へること切にして、左右を笑ひ顧視すること得ざれ。真實の悲れみ濟ふ心を起し、名利を爲すこと勿かれ。衆より一人を詮びて座主と爲し、稽して請し、莊嚴し、經讚する法事の、須らくその次第を知らしめよ。一人、副座となし、香火、打磬、聲を同ふして讚を唱へるを知り、専ら檢校たることを知らしめよ。先ず須らく香を焚き、磬聲かせ、聖衆を召請せよ。座[主]に當る人、念佛一聲して衆に白して云く「敬しく道場の衆等に白す。總じて須らく至まりし誠

<sup>13</sup> 前掲拙稿 The Tun-huang Su-chiang chuang-yen hui-hsiang wen 俗講莊嚴廻向文 and Transformation Texts。

心を發し端<sup>そろ</sup>ひ坐して合掌し、阿彌陀佛、一切賢聖の目前に對せるが如きを觀想せよ。若し能く是の如く心を用ふれば即ち賢聖は降臨し、龍天は護念せん。經讚の法事を聽<sup>ちようもん</sup>聞すれば、衆等をして即ち言下に於ひて無量の罪を滅し、無量の福を獲<sup>え</sup>、心は開き意は解して速やかに甚だ深き念佛三昧を證し、無生忍を得、大總持を獲、六波羅蜜、神通自在を具さにせしめん」と。言ひ訖れば即ち磬を打つこと一下し、作梵し、了れば、阿彌陀佛、觀音、勢至、地藏菩薩、各れ三、五十聲念ぜよ。然る後に至<sup>きは</sup>まりし心にて稽して請ぜよ。次に莊嚴し、了れば、前に依りて念佛せよ。即ち須らく其の道場の徒衆の多少を觀るべし。或ひは晝、或ひは夜、或ひは廣、或ひは略、道場の請主有りて、何の爲の善事なるか、切に須らく知り、時に別に莊嚴を爲し、廣く念誦を與ふべし。道場に坐する時、或ひは兩坐、三坐、乃至は多坐有れば、其れ彌陀觀經、一坐に一啓せよ。……

このように融通無碍に變化することが許されているとしながらではあるが、次第という点から見た場合、「即ち磬を打つこと一下し、作梵し、了れば、阿彌陀佛、觀音、勢至、地藏菩薩、各れ三、五十聲念ぜよ。然る後に至<sup>きは</sup>まりし心にて稽して請ぜよ。次に莊嚴し」の部分は、「俗講莊嚴廻向文」に「作梵し、了れば法師先ず佛を三二十口念じ、竟れば都講を令て擧經せしめ、便ち廻向せよ。」とあるのと酷似している。「俗講莊嚴廻向文」ではこの文言が題名の下に記されており、俗講なので經題をまず擧してから「廻向」つまりこの「俗講莊嚴廻向文」を讀誦せよという意味と捉えることができる譯である。二者を比較するとこの點に若干の差がある程度である。

また、作梵の作法に押座文が用いられるケースについても『八關齋戒文』を論じる際に指摘したことがある通りで、押座文、莊嚴文が連続して變文に見られるようになるケースもこうして生じることが改めて確認できるであろう。

このように考えを進めた時、こうした形式が後代の話本や白話小説に及ぼした影響にはどのようなことがあるだろうか。梵唄、押座文が話本、白話小説の入話の韻文になっていくことはしばしば指摘されている通りである。では、莊嚴文は變文で見られて以降はどのように形を變えていったと考えられるであろうか。

例えば、同じ敦煌本ではあるが、これらがかなり小説の中に融合している例としては、『降魔變文』や『廬山遠公話』の冒頭部があげられることは筆者もすでに指摘している通りである<sup>14</sup>。

<sup>14</sup>注3参照。

S.5511 等の『降魔變文』に言う<sup>15</sup>。

蓋聞如來說法，萬萬恆沙；菩薩傳經，千千世界。爰初鹿苑，度五俱輪，終至雙林，降十梵志。演微言愛河息浪，談般若煩惱山摧。會三點於真原，淨六塵於人境，所以舍衛大城之內，起慈念而度群生；給孤長者園中，秉智燈而傳法印。如來以著衣持鉢，高步清晨，即以食時，還至本處。乞食長福德之業，次第表平等之慈，洗足彰持戒之功，敷坐乃安禪靜慮。然後人天瞻仰而圍繞，龍神肅恭而樂聽。須菩提具威儀而出會，整法服而翹誠，欲興無相之談，乃發有疑之問。故得子稱希有，佛讚善哉。遂乃廣擗玄關，大開義藏，聞經者使四心不倒，五眼晶暉，四果咸遣。我人三賢，得遊八正；我人四想，了體性而皆空，六類有情，咸歸滅度。初中後之布施不足爲多，盡十方之虛空叵知其量。諸相非相，見如來之法身；生等無生，得真妄之平等。然則窮大千之七寶，比四句而全輕；後五濁之衆生，[等]一聞而超勝境。然後法尚應捨，戀筏卻被沉淪，渾彼我於空空，泯是非於妙有。不染六塵之境，契會菩提；即於六識推求，萬像皆含於般若。三世諸佛，從此經生；最妙菩提，從此經出。加以括囊群教，許爲衆經之要目。傳譯中夏，年餘數百。雖則諷誦流布，章疏芬(紛)然，猶恐義未合於聖心，理或乖於中道。

伏維我大唐漢聖主開元天寶聖文神武應道皇帝陛下，化越千古，聲超百王，文該五典之精微，武折九夷之肝膽。八表總無爲之化，四方歌堯舜之風。加以化洽之餘，每弘揚於三教。或以探尋儒道，盡性窮原；注解釋宗，句(鉤)深相(極)遠。聖恩與海泉俱湧，天開與日月齋明。道教由是重興，佛日因茲重曜。寶林之上，喜見葉而爭開；總持園中，派法雲而廣潤。

然今題首金剛般若波羅蜜經者，金剛以堅銳爲喻，般若以智慧爲稱，波羅彼岸，到弘名蜜多，經則貫穿爲義。善政之儀，故號金剛般若波羅蜜經。大覺世尊於舍衛國祇樹給孤之園，宣說此經，開我蜜藏。四衆圍遶，群仙護持，天雨四花，雲廓八境，蓋如來之妙力，難可名言者哉！須達爲人慈善，好給濟於孤貧，是以因行立名給孤。布金買地，修建伽藍，請佛延僧，是以列名經內。祇陀睹其重法，施樹同營，緣以君重臣輕，標名有其先後。委被事狀，述在下文。

また S.2073 『廬山遠公話』に言う。

<sup>15</sup>黃征、張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局、1997年）等を参照。

蓋聞法王蕩蕩，佛教巍巍；王法無私，佛行平等。王留攻（政）教，佛演真宗。皆是十二部尊經，總是釋迦梁津。如來滅度之後，衆聖潛形於像法中。…

蓋し聞くに、法王は蕩蕩、佛教は巍巍にして、王法に私無く、佛行は平等にして、王は政の教へを留め、佛は真の宗を演ぶ。皆な是れ十二部の尊經、總て是れ釋迦の梁津なり。如來滅度の後、衆聖は形を像法の中に潜む。……

これらより見ると、「蓋聞……」のような冒頭部分の共通性が見られるほか、内容上も①佛教の教えを稱える部分があり、そして②その世界觀を述べ、それを支える③帝王の徳を讚歎する内容が見られる莊嚴文に相當する部分があることが分かる。これを本稿において説いてきた莊嚴の意味と併せ考えるとき、まさに強い共通性を感じるのではないか。

同じ視點から後代の白話小説を見るとき、大いなる教えの道理が説かれ、天界より物語の大義が語られ、現世の偉人の徳が語られる作品が大變多いことに改めて気づくのではないか。こうしたところに、佛教儀禮とその次第に影響を受けた文學という大枠の流れを見ることができるよう改めて思う次第である。

（作者は廣島大學大學院人間社會科學研究科教授）